

参考文献

注釈

- 藤原清輔 『古今集勘物』
 藤原教長 『古今集註』
 藤原顕昭 『古今集註』
 藤原顕昭・藤原定家 『顕註密勘』
 寂恵 『古今集勘物』
 東常縁・宗祇 『古今和歌集両度聞書』
 飛鳥井雅俊 『古今栄雅抄』
- (以上、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』所収の「古注七種集成」の翻刻による。なお、『顕註密勘』は久曾神昇編『日本歌学大系 別巻五』〈風間書房、1981・11〉、『日本古典文学影印叢刊 22 顕註密勘』〈日本古典文学会、1987・9〉も参照)
- 著者未詳 『後撰集正義』(『日本歌学大系 別巻五』、風間書房、1981・11)
 著者未詳 『後撰集聞書』(芦田耕一「桑原文庫所蔵『後撰集聞書』」、『山陰文化研究紀要』21号、1981・3; 芦田耕一「島根大学付属図書館所蔵『後撰集聞書注』」、『国文学ノート』第14・15号、1981・11; 1982・12)
- 藤原定家 『三代集之間事』(『三代集の研究』、明治書院、1981・5)
 北村季吟 『八代集抄』(山岸徳平『八代集全註』第一・二巻、有精堂、1960・7)
- 中山美石 『後撰集新抄』(『後撰集新抄』〈復刻版〉、風間書房、1988・5)
 耕雲 『古今集聞書』(耕雲聞書研究会『古今集古注釈集成 耕雲聞書』、笠間書院、1995・2)
- 堯恵 『古今集延五記』(秋永一枝・田辺佳代『古今集延五記天理図書館蔵』、笠間書院 1978・8)
- 契沖 『古今余材抄』(『契沖全集』巻八、岩波書店、1973・3)
 賀茂真淵 『続万葉論』(『増訂 賀茂真淵全集』巻六、吉川弘文館、1929・12)
 『古今和歌集打聴』(『増訂 賀茂真淵全集』巻七、吉川弘文館、1929・12)
- 本居宣長 『古今和歌集遠鏡』(『本居宣長全集』巻三、築摩書房、1969・1)
 香川景樹 『古今和歌集正義』、積善館、1895・11
 藤井高尚 『古今和歌集新釈』(〈復刻版〉、風間書房、1989・11)
 金子元臣 『古今和歌集評釈』、明治書院、1908・7

- 『古今和歌集評釈』(昭和新版)、明治書院、1927・3
- 小西甚一 『新註国文学叢書 古今和歌集』、講談社、1949・9
- 西下経一 『古今和歌集新講』、三省堂、1933・6
- 佐伯梅友 『日本古典文学大系 古今和歌集』、岩波書店、1958・3
- 窪田空穂 『古今和歌集評釈』(新訂版)、東京堂、1960・3
- 松田武夫 『新釈古今和歌集』、風間書房、1968・3
- 小沢正夫 『日本古典文学全集 古今和歌集』、小学館、1971・4
- 窪田章一郎 『古今和歌集』、角川書店、1973・1
- 窪田章一郎・杉谷寿朗・藤平春男 『鑑賞日本古典文学第7巻 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集』、角川書店、1975・9
- 竹岡正夫 『古今和歌集全評釈』(補訂版)、右文書院、1976・11
- 奥村恆哉 『新潮日本古典集成 古今和歌集』、新潮社、1978・7
- 小沢正夫・松田成穂 『完訳 日本の古典 古今和歌集』、小学館、1983・4
- 小町谷照彦 「古今和歌集評釈」、国文学解釈と教材の研究第28巻第1号(1983・1)から
連載
『新日本古典文学大系 拾遺和歌集』、岩波書店、1990・1
- 小島憲之・新井栄蔵 『新日本古典文学大系 古今和歌集』、岩波書店、1989・2
- 片桐洋一 『全対訳日本古典新書 古今和歌集』、1984・3
『古今和歌集全評釈』、講談社、1998・2
『新日本古典文学大系 後撰和歌集』、岩波書店、1990・4
- 岸上慎二・杉谷寿朗 『後撰和歌集』、笠間書院、1988・5
- 木船重昭 『後撰和歌集全釈』、笠間書院、1988・11
- 工藤重矩 『後撰和歌集』、和泉書院、1992・9
- 増田繁夫 『和歌文学大系 拾遺和歌集』、明治書院、2003・1
- 川村晃生 『後拾遺和歌集』、和泉書院、1991・3
- 藤本一恵 『後拾遺和歌集全釈』、風間書房、1993・7
- 犬養廉・平野由紀子・いさら会 『後拾遺和歌集新釈』、笠間書院、1996・2
- 久保田淳・平田喜信 『新日本古典文学大系 後拾遺和歌集』、岩波書店、1994・4
- 正宗敦夫 『金葉和歌集講義』、自治日報社、1968・11
- 菅根順之 『詞花和歌集全釈』、笠間書院、1983・10
- 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩 『新日本古典文学大系 金葉和歌集・詞花和歌集』、岩波書店、1989・9
- 片野達郎・松野洋一 『新日本古典文学大系 千載和歌集』、岩波書店、1993・4
- 上條彰次 『千載和歌集』、和泉書院、1994・11

- 本居宣長 『美濃の家づと』(『本居宣長全集』第三卷、筑摩書房、1969・1)
- 石原正明 『尾張廻家苞』(『国文註釈全書』第八卷、国学院大学出版部、1909・5)
- 塩井正男 『新古今和歌集詳解』、明治書院、1908・8
- 久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎『日本古典文学大系 新古今和歌集』、岩波書店、1958・2
- 石田吉貞 『新古今和歌集全註解』、有精堂、1960・3
- 窪田章一郎・小島吉雄 『古典日本文学全集 古今和歌集 新古今和歌集』、筑摩書房、1962・3
- 窪田空穂 『完本新古今和歌集評釈』、東京堂、1964・2—1965・2
- 峯村文人 『日本古典文学全集 新古今和歌集』、小学館、1974・3
- 久保田淳 『新古今和歌集全評釈』、講談社、1976・10—1977・12
- 『新潮日本古典集成 新古今和歌集』、新潮社、1979・3—1979・9
- 田中裕・赤瀬信吾 『新日本古典文学大系 新古今和歌集』、岩波書店、1992・1
- 高木市之助・五味智英・大野晋 『日本古典文学大系 万葉集』、岩波書店、1957・5—1962・5
- 中西進 『万葉集全訳注原文付』、講談社、1978・8—1983・10
- 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 『新潮日本古典集成 万葉集』、新潮社、1976・11—1984・9
- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 『日本古典文学全集 万葉集』、小学館、1971・1—1975・10
- 『完訳 日本の古典 万葉集』、小学館、1982・11—1987・9
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 『新日本古典文学大系 万葉集』、岩波書店、1999・5—2003・10
- 野口元大 『新潮日本古典集成 竹取物語』、新潮社、1979・5
- 渡辺実 『新潮日本古典集成 伊勢物語』、新潮社、1976・9
- 木村正中 『新潮日本古典集成 土佐日記 貫之集』、新潮社、1988・12
- 大曾根章介・堀内秀晃 『新潮日本古典集成 和漢朗詠集』、新潮社、1983・9
- 萩谷朴 『日本古典評釈・全注釈叢書 土佐日記全注釈』、角川書店、1972・8
- 『新潮日本古典集成 枕草子』、新潮社、1977・4
- 『枕草子解環』、同朋舎、1981・10
- 石田穰二・清水好子 『新潮日本古典集成 源氏物語』、新潮社、

1976・6—1985・4

- 三木紀人 『新潮日本古典集成 方丈記 発心集』、新潮社、1976・10
- 田中重太郎 『日本古典評釈・全注釈叢書 枕冊子全注釈』、角川書店、
1972・12—1983・3
- 田中大秀 『土佐日記解』(『土佐日記古注釈大成』、日本図書センター、
1979・6)
- 石川忠久 『新釈漢文大系 詩経』、明治書院、1997・9—2000・7
- 星川清孝 『新釈漢文大系 楚辞』、明治書院、1970・9
- 中島千秋・高橋忠彦 『新釈漢文大系 文選 (賦篇)』、明治書院、
1977・1—2001・7
- 内田泉之助・網祐次 『新釈漢文大系 文選 (詩篇)』、明治書院、
1963・10—1964・12
- 原田種成・竹田晃 『新釈漢文大系 文選 (文章篇)』、明治書院、
1994・7—2001・1
- 内田泉之助 『新釈漢文大系 玉台新詠』、明治書院、1974・2—1975・5
- 目加田誠 『新釈漢文大系 世説新語』、明治書院、1975・1—1978・8
『新釈漢文大系 唐詩選』、明治書院、1964・3
- 岡村繁 『新釈漢文大系 白氏文集』(三・四)、明治書院、
1988・7—1990・11
- 佐久節 『続国訳漢文大成 白楽天全詩集』(復刻版)、日本図書センター、1978・7

夕暮の研究史一覽

(日本文学関係)

- 秋本守英 『夕暮』から『秋の夕暮』へ、表現学論考第2号、1986・4
- 有吉保 「秋の夕暮——三夕の歌——」(『新古今和歌集の研究基盤と構成』)、
三省堂、1968・4
- 石井博 「カハタレ (彼誰) とタソガレ (黄昏)」、人文社会科学研究No. 36、
1996・3
- 石原明 「新古今和歌集の三夕の歌について」、中世近世文学研究第12号、1979・1
- 市村宏 「万葉集特講 (189) 夕浪千鳥」、次元第24巻第1号、1978・1
- 稲田利徳 「夕立の歌——中世和歌における歌材の拡大——」、国語国文第51巻第6
号、1982・6

- 今西祐一郎 『『ひぐれ』攷』、『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』、桜楓社、1989・6
- 岩城準太郎 『黄昏から黎明まで』、『国語と国文学第2巻第10号』、1925・10
- 宇佐美斉 『落日論』、筑摩書房、1989・6
- 大窪梅子 『『夕居る雲』考』、『国士館短期大学紀要第3号』、1977・12
- 奥山修 『秋の夕暮——その無常感と幽玄美——』、『同朋国文第11号』、1978・3
- 小田剛 『再び『見渡せば花も紅葉もなかりけり…』の歌について』(1)、
滋賀大国文第15号、1977・12；(2)、同誌第16号、1978・12；
(3)、同誌第19号、1981・10
- 加登千晶 『源氏物語の日——『夕日、はなやかにさして』についての一考察——』、
物語文学論究第8号、1983・12
- 川嶋秀之 『漢字の履歴書 黄昏』、『言語第27巻第5号』、1998・5
- 川津紀子 『万葉集に於ける『夕占』』、『上代文学研究会会報第6号』、1978・12
- 川原路子 『北原白秋論——夕暮のイメージを中心に——』、
日本文学ノート第22号、1987・1
- 川本皓嗣 『秋の夕暮』(『日本詩歌の伝統——七と五の詩学——』)、岩波書店、
1991・11
- 薦田純穂 『『秋の夕風』考——『秋の夕暮』との関連において——』、
高知女子大国文第17号、1981・10
- 阪口保 『夕日は赤いか——単一素材に関する和歌史的展望——』(上) 神戸山手女
子短期大学紀要第4集、1960・2；(下) 同誌第6集、1961・11
- 佐佐木隆 『『萬葉集』の『豊旗雲に入り日見し』存疑——構文面からの再検討——』、
国語国文第65巻第8号、1996・8
- 『わたつみの豊旗雲に…』の歌の第三句』、『萬葉集』第183号、2003・2
- 佐藤武義 『万葉語『夕+』の考察』(『萬葉集の世界とその展開』)、白帝社、
1998・4
- 『上代語『日暮』『夕暮』考』、『桜文論叢』第51巻、2000・8
- 須藤松雄 『俊成作『夕されば野への秋風』の詠の自然像——日本文学に於ける自然
の研究の一環として』、『清泉女子大学紀要』6、1959・3
- 関口祐未 『定家の『見わたせば』試論——白詩『蘭省花時錦帳下、廬山夜雨草庵中』
との関連をめぐって——』、『明治大学大学院文学研究論集(文学・史学・
地理学)』第16号、2002・2
- 曾我美智子 『和泉式部集『夕暮はいかなるときぞ』の歌について』、『愛文』第15号、
1979・7
- 高橋介 『春のあけぼの 秋のゆふぐれ——新古今歌人の一視座——』、
文学史研究20、1980・8

- 竹下豊 「尾花なみよる秋の夕ぐれ——俊頼の自讃歌一首——」、
短歌第 39 卷第 9 号、1992・9
- 田中幹子 「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露——和漢朗詠集の秋
の夕（秋興・秋晩）について——」、京都語文第 3 号、1998・10
『和漢朗詠集』『後拾遺集』における秋の夕暮れ——『夕されば野辺の
秋風身にしみて』——」、就実語文第 20 号、1999・11
- 田中裕 「古歌逍遥 夕立の雲」、短歌第 39 卷第 6 号、1992・6。
- 塚本邦雄 「夕暮の諧調（『夕暮の諧調』）、人文書院、1971・9
『世紀末花伝書 露の夕暮』、文学界第 46 卷第 11 号、1992・11
- 永田友市 「夕景の美」、愛知淑徳大学論集第 18 号、1993・3
- 中島尚 「夕暮の歌」、冬扇第 3 号、1979・3
- 中野方子 「暮れぬ間の今日——『古今集』哀傷部における仏典受容——」、
国文第 91 号、2001・8
- 西丸光子 「三日月と夕月夜——平安時代の文学素材としての位置と性格——」、
国文目白第 8 号、1969・3、
- 西村亨 「末流の歌——夕暮の感傷——」、短歌第 26 卷第 10 号、1979・10
- 野田浩子 「寒き夕は大和し思ほゆ」、東横国文学第 26 号、1994・3
- 平岡敏夫 『〈夕暮れ〉の文学史』、おうふう、2004・10
- 福島行一 「万葉集の夕暮の歌」、防衛大学校紀要・人文社会科学編第 12 号、1966・3
- 福田千重子 「古代の落日——隔絶への志向——」、語学と文学第 12 号、1967・8
- 古橋信孝 「続・日本のうた 夕暮の桜」、言語第 22 卷第 4 号、1993・4
- 朴蕙成 「夕暮の雨——永福門院の歌の表現を中心に——」、
文芸と批評第 7 卷第 3 号、1991・4
- 三方達一 「古典和歌における『秋の夕暮』『夕暮』——特に『新古今集』の——」、
筑紫女学園短期大学紀要第 18 号、1983・3
- 村尾誠一 「春の夕暮のことなど」、東京外国語大学日本語学科年報 11、1989・3
- 村松佳奈子 「八代集における『夕暮』の歌について」、学習院大学国語国文学会誌
第 40 号、1997・3
- 諸井耕二 「石樵 乃木希典の漢詩（一）——『立斜陽』と『夕陽蒼』——」、
宇部短期大学学術報告第 30 号、1993・7
- 諸井康子 「日本古代文学における夕日の心象——夕日詠の成立をめぐって——」、
十文字学園女子短期大学研究紀要第 9 号、1977・7
- 椋田千代美 「風雅和歌集研究——『夕暮れの歌』にみる特質——」、
広島女学院大学国語国文学誌第 17 号、1987・12
- 森澤眞直 「俊成『夕されば』と『伊勢物語』——言説の位相とコンテクスト連関——」、
日本文芸論叢第 11 号、1997・3

- 「定家歌『みわたせば花も紅葉も』論——研究史の検証と解釈の秩序——」、
日本文芸論叢第13・14合併号、2000・3
- 「定家歌『みわたせば花も紅葉も』の背景——『ながむれば』と『秋の夕暮』に拠りつつ——」、文化第65巻第1・2号、2001・9
- 森田昭二 「わが心春にむかへる夕暮の——『風雅和歌集』七番歌の目指す世界——」
(1)、白珠第47巻第1号、1992・1；(2)、同誌第47巻第2号、1992・2；
(3)、同誌第47巻第3号、1992・3
- 森野宗明 「いわゆる美的語彙の一考察——『春の曙』・『秋の夕暮』系の歌語を
めぐって——」、日本語学第7巻11号、1988・11
- 柳田国男 「かはたれ時」、1930・11 (『妖怪談義』、『柳田国男全集』第二十巻所収、
筑摩書房)
- 山口佳紀 「『わたつみの豊旗雲に』の歌の解釈——動詞連用形の一用法に及ぶ——」、
萬葉第180号、2002・5
- 吉岡曠 「秋の夕暮——新古今集——」、国文学解釈と教材の研究第21巻第7号、
1976・6
- 脇谷英勝 「俊成『夕されば』詠考」、日本文芸研究第22巻第3・4号、1970・11

中国文学関係

- 王同書 「枯荷、夕陽蕭瑟美——李義山詩特色別議——」、
徐州師範学院学報(哲学社会科学版)1989年第2期、1989・6
- 王立 「暮靄沈沈詩境闊——中国古典文学中的黄昏意象——」、
学習奥探索第76期、1991・9
- 笈久美子 「春の夕暮れ」(『中国文学歳時記』春〔上〕)、同朋社、1988・11
- 小池一郎 「『暮れる』ということ——古代詩の時間意識——」、中国文学報第24冊、
1974・10
- 胡曉明 「夕陽西下」(『万川之月——中国山水詩的心靈境界——』)、三聯書店、
1992・6
- 趙松元 「中国古代詩歌中的黄昏意象」、求索1993年第5期、1993
- 鄭詩群 「試論李商隱《樂遊原》的思想内容和美学意義——兼評歷來注釋——」、
中南民族学院学報(哲学社会科学版)第17期、1985・7、
- 任海天 「論韋庄詩中的『夕陽情緒』」、北方論叢、1996年第2期、1996・3
- 傅道彬 「黄昏與中国文学的日暮情思」(『晚唐鐘聲——中国文化的原形批評——』)、
東方出版社、1996・6
- 松浦友久 「秋の夕べ」(『中国文学歳時記』秋〔上〕)、同朋社、1989・3
- 森博行 「魏・晋詩における『夕日』について」、中国文学報第25冊、1975・4

- 山之内正彦 「落日と夕陽——唐詩における夕日の詩語初探——」、東洋文化研究所紀要第 63 冊、1974・3
- 吉川幸次郎 「燃焼と持続——六朝詩と唐詩——」、1959・9 (『吉川幸次郎全集』第七卷、筑摩書房)
- 「落日心猶在」、1962・10 (『吉川幸次郎全集』第二十卷、筑摩書房)
- 「新しい夕陽」、1963・12 (『吉川幸次郎全集』第七卷、筑摩書房)

その他

- 赤羽淑 『定家の歌一首』、桜楓社、1976・5
- 秋澤互 『『古今集』嘆老歌考』、王朝文学史稿第 15 号、1989・3
- 浅田徹 「顕註密勘の識語をめぐって」、和歌文学研究第 72 号、1996・6
- 浅田徹・藤平泉 『古今歌と新古今集の方法』、笠間書院、2004・10
- 阿蘇瑞枝 「序詞・枕詞・対句」(有吉保『和歌文学講座 2 万葉集 I』)、勉誠社、1992・9
- 有吉保 『新古今和歌集の研究 基盤と構成』、三省堂、1968・4
- 『新古今和歌集の研究 続編』、笠間書院、1996・3
- 『和歌文学辞典』、桜楓社、1991・2
- 安藤信広 「羈旅する詩人たち——『万葉集』と六朝文学と——」、日本文学誌要第 24 号、1981・2
- 飯塚浩 『『露』の歌の変遷についての考察——万葉から古今へ——』、解釈第 25 卷 3 号、1979・3
- 家永三郎 『上代倭絵年表』、墨水書房、1966・5
- 伊坂淳一 「『つごもり(晦日)』のはなし」存疑」、国語国文第 56 卷第 3 号、1987・3
- 石山宗晏 「万葉羈旅歌の世界」、旭川国文第 15 号、1999・10
- 井手至 「秋風の嘆き」、文学史研究第 29 号、1988・12
- 「万葉びとの心性から見た昼夜のけじめ——日の意識をめぐって——」(『高岡市万葉歴史館論集 4 時の万葉集』)、笠間書院、2001・3
- 伊藤高広 『『秋風』考——中世歌語とその機能——』、梁塵研究と資料第 6 号、1988・12
- 伊庭伸恵 「露の文学史——万葉集から古今集への流れ——」、物語文学論究第 7 号、1983・3
- 今浜通隆 『日と都といづれぞ遠き』考——平安朝文学と『世説』——」(〈上〉武

- 蔵野日本文学第7号、1998年3月；<中>同誌第8号、1999年3月；<下>同誌第9号、2000年3月；<統一>同誌第11号、2002年3月；<続二>同誌第12号、2003年3月；<続三>同誌第13号、2004年3月
- 岩下均 『『空蟬』考』、目白学園国語国文学第6号、1997・3
- 上野理 『後拾遺集前後』、笠間書院、1976・4
- 上野誠 「人麻呂挽歌の発想——枕と床と——」、日本文学論究第45冊、1986・3
- 大岡信 『日本詩人選 紀貫之』、築摩書房、1971・9
「読人しらずのうた——歌の実用性と魔力との関係について——」、
国文学解釈と教材の研究第17巻2号、1972・2
- 太田郁子 『和漢朗詠集』の『三月尽』・『九月尽』、国文学言語と文芸第91号、
1981・3
- 大高円 「万葉集における月と日について——天体の月と日——」、
国文白百合第15号、1984・3
- 岡崎義恵 「柿本人麿と杜少陵——特にその羈旅の作についての比較研究——」、
文学第2巻第6号、1934・6
- 澤瀉久孝 『万葉の作品と時代』、岩波書店、1941・3
- 小野寛 「家持の春愁絶唱三首をめぐって」(『高岡市万葉歴史館叢書13
家持の争点1』)、高岡市万葉歴史館、2001・3
- 小野泰央 『和漢朗詠集』の『蟬』について、白門国文第7号、1988・2
- 折口信夫 「上代貴族生活の展開」、歴史教育第8巻第7号、1933・7
(『折口信夫全集』第九巻、中央公論社)
「言霊信仰」、国史辞典4、1943・12
(『折口信夫全集』第二十巻、中央公論社)
- 甲斐睦朗・石黒由香里 「物の名・植物と動物の歌ことば——『萩』と『鹿』をめぐ
って——」(『古代文学講座7 ことばの神話学』)、勉誠社、
1994・11
- 影山尚之 「晴れの日、曇りの日——万葉集のことば・ノート／付三輪山歌の雲——」、
園田国文第17号、1996・3
- 梶裕史 「万葉羈旅歌論」、三田国文第9号、1988・6
- 片桐洋一 『王朝和歌の世界——自然感情と美意識——』、世界思想社、1984・10
『歌枕歌ことば辞典 増訂版』、角川書店、1999・6、
「伊勢物語の本質とその背景——白詩との関係にふれつつ——」、
文学・語学第105号、1985・5
『王朝文学の本質と変容韻文編』、和泉書院、2001・11

- 金沢規雄 「大伴家持試論——『春の野に霞たなびきうら悲し…』の一首をめぐって——」、文芸研究第111集、1986・1
- 金子彦二郎 『平安時代文学と白氏文集句題和歌・千載佳句研究篇』(増補版)、培風館、1955・6
- 加納喜光 「漢字動物苑9・蟬」、月刊しにか69号、1995・12
- 唐木順三 『日本人の心の歴史』、筑摩書房、1970・2
- 川合康三 「蟬の詩に見る詩の転変」中国文学報第57冊、1998・10
- 川口久雄 『古典の変容と新生』、明治書院、1984・11
- 川津紀子 「万葉集における『夕占』」、上代文学研究会会報第6号、1987・12
- 川村晃生 『摂政期和歌史の研究』、三弥井書店、1991・4
「初瀬山——鐘と桜と——」、銀杏鳥歌第6号、1991・6
- 川村幸次郎 「万葉集の鹿——万葉人の美意識——」、解釈第25巻11号、1979・11
- 菊地義裕 「万葉の春の景」、鶴岡文庫たより第11号、2001・3
- 木藤智子 「紀貫之歌の漢詩的表現と場」、百舌鳥国文第8号、1988・10
- 久曾神昇 『古今和歌集綜覧』(改訂版)、書芸文化新社、1989・6
- 久保田淳・馬場あき子 『歌ことば歌枕大辞典』、角川書店、1999・5
- 黒川昌享 「『山近き入相の鐘の声ごとに』(枕草子二二四段)の解釈」、河24号、1991・6
- 黒川洋一・入谷仙介・山本和義・横山弘・深澤一幸 『中国文学歳時記』、同朋社、1988・12—1989・6
- 小池正胤 「つごもり大つごもり——月と闇と人間——」、高校通信東書国語298号、1989・12
- 小島憲之 『上代日本文学と中国文学』、塙書房、1962・9—1966・3
「語の性格——万葉語『晚蟬』の場合——」、美夫君志第23号、1979・3
『古今集以前』、塙書房、1976・2
「四季語を通して——『尽日』の誕生——」、国語国文第46巻第1号、1977・1
- 小西甚一 「古今集的表現の成立」、日本学士院紀要第7巻第3号、1949・11
- 後藤重朗 『新古今和歌集の基礎的研究』、塙書房、1968・3
- 小林賢章 『アカツキの研究 平安人の時間』、和泉書院、2003・2
- 小林祥次郎 「せみ(付)ひぐらし——古典文学歳時記のうち——」、群馬県立女子大学国文学研究第16号、1996・3
- 五味智英 『増補 古代和歌』、笠間書房、1987・3
- 近藤香 「藤原定家の秀歌撮取——『定家八代抄』の羈旅歌を例に——」、

- 立正大学大学院日本語・日本文学研究第2号、1998・5
- 近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』、風間書院、2005・2
- 今野達・佐竹昭広・上田閑照 『岩波講座 日本文学と仏教』、岩波書店、
1993・11—1995・5
- 西郷信綱 「枕詞の詩学」、文学第53巻第2号、1985・2
- 佐々木克衛 「鶉鳴くなり深草の里——俊恵の俊成自讃歌批判をめぐって——」、
国土館短期大学紀要第2号、1976・12
- 佐々木民夫 「ひぐらしの歌」、万葉研究第12号、1991・12
『『秋風』考——万葉集の『風』『秋風』——』、岩手県立盛岡短期大学研究
報告第43号（生活科学・保育・共通編）、1992・12
- 佐佐木幸綱『旅の詩 詩の旅』、時事通信社、1988・7
- 佐田公子 「蟬の羽の夜の衣は薄けれど——古今和歌集 雑歌上876番歌の位置——」、
和歌文学研究第78号、1999・6
- 佐藤茂樹 「『新古今』羈旅歌の『白雲』詠の成立」、
広島女学院大学国語国文学誌第26号、1996・12
- 佐藤美知子 「定家の歌における現実の影——『駒とめて……』の歌をめぐって——」、
大谷女子大國文創刊号、1971・3
- 沢田恵理子 「八代集哀傷歌の一考察」、女子大國文第71号、1973・10
- 島田修三 「万葉の〈秋風〉——季題意識の展開——」、淑徳国文第33号、1992・2
- 島田良二 「古今集の枕詞」、茨城大学人文学部紀要文学科論集第3号、1969・12
- 島津久基 「枕草子短観——山の端いと近くなりたるに——」、文学第6巻第9号、
1938・9
- 白井忠功 「『蟬の歌』覚書——正徹の和歌について——」立正大学国語国文第37号、
1999・3
- 白井裕子 「枕詞の消長」、国文目白第5号、1965・10
- 周防朋子 「平安朝における『つごもり』について——『尽日』意識との関わり——」、
甲南大学紀要文学編119、2001・3
- 菅野禮行 『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』、大修館、1988・10
- 鈴木広子 『古今和歌集表現論』、笠間書院、2000・12
- 高坂貴代 「古今集撰者達の枕詞」、国文白百合第22号、1991・3
- 多田一臣 『万葉への文学史 万葉からの文学史』、笠間書院、2001・10
- 辰巳正明 『万葉集と中国文学』、笠間書院、1987・2
- 田中元 『古代日本人の時間意識——その構造と展開——』、吉川弘文館、1975・12
- 田中重太郎 『枕冊子研究』、古典文庫、1952・7

- 田中新一 『平安朝文学に見る二元的四季観』、風間書房、1990・4
- 田中真理 「柿本人麻呂の対句表現」、日本語と日本文学第40号、2005・2
- 田中幹子 『『古今集』における季の到来と辞去について——三月尽意識の展開——』、
『中古文学』創立三十周年記念臨時創刊号、1997・3
- 田邊幸雄 「萬葉集羈旅歌考——旅行主題歌について——」、
『国語と国文学』第17巻第10号、1940・10
- 塚原竜一 「概念カテゴリーからみた〈枕詞—被枕詞〉表現の特性」、
『愛媛国文研究』第43号、1993・12
- 津田左右吉 「おもひだすまゝ (十五) 秋の悲しさ」、
『津田左右吉全集』第二十一巻、岩波書店、1965・6
- 鶴田光枝 「和歌文学にあらわれた『鹿』——八代集を中心にして——」、
『国文目白』第9号、1970・1
- 鉄野昌弘 「『空 (虚) 蝉』と仏教思想」、日本古典文学会会報第121号、1992・1
- 寺窪健志 「夏の夜のひぐらしの声——大伴家持『晚蟬歌』試論——」、
『日本文芸論叢』第11号、1997・3
- 『『いぶせし』か『いぶせみ』か——大伴家持『晚蟬歌』試論補遺——』、
『解釈』第49巻3・4号、2003・4
- 土井健司 『日本の歌 中国の詩——花鳥風月——』、白帝社、1989・2
- 戸谷高明 『古代文学の天と日——その思想と表現——』、新典社、1989・4
- 中西進 『万葉の秀歌』、講談社、1984・5—1984・6
- 『万葉集の比較文学的研究』、講談社、1995・3—1995・5
- 中野方子 「貫之歌と漢詩文——閨怨詩の影響——」、和歌文学研究第71号、
1995・12
- 「兼輔哀傷歌——貫之晩年における漢籍受容——」、
『立正大学国語国文』第38号、2000・3
- 中原健二 「詩語『三月尽』試論」、未名第13号、1995・3
- 永藤靖 『古代日本文学と時間意識』、未来社、1979・3
- 中村佳文 「菅原道真『惜春詩』の形成——白居易『三月尽詩』の享受をめぐって——」、
『平安朝文学研究』復刊第7号、1998・11
- 西川寛子 『『古今和歌集』の羈旅歌と『萬葉集』の羈旅歌について』、
『文芸』第17号、1986・3
- 西下経一・滝沢貞夫 『古今集校本』、笠間書房、1977・9
- 西丸光子 「三日月と夕月夜——平安時代の文学素材としての位置と性格——」、
『国文目白』第8号、1969・3

- 野口智子 「和歌における美意識の変遷——万葉集及び八代集の『露』の歌を中心に——」、就実語文第5号、1984・12
- 橋本健 「後拾遺集『羈旅』の構造」、専修国文第19号、1976・3
- 橋本達雄 『万葉宮廷歌人の研究』、笠間書院、1975・3
- 長谷章久 「小倉山考」、国文学解釈と教材の研究第6巻第12号、1961・9
- 長谷川範彰 「『秋』・『袖』・『露』の描くもの——新古今期恋歌に関する一試論」、立教大学日本文学第91号、2003・12
- 「『遇不逢恋』の変容」、立教大学日本文学第94号、2005・7
- 馬場婦久子 「源氏物語の和歌表現——その位置、『秋風』『鐘の声』を中心に——」、女子大文学国文篇第31号、1980・3
- 東光治 『万葉動物考』、人文書院、1935・6
- 久松潜一・実方清 『日本歌人講座第二巻 中古の歌人』、弘文堂、1968・11
- 平舘英子 「悲傷羈旅」、東京成徳短期大学紀要第30号、1997・9
- 福井幸子 「中世的抒情考——『鐘』の荷わされた意念をめぐって——」、就実論叢第2号、1973
- 藤田洋治 「古今和歌集撰者時代の枕詞」、中古文学第56号、1995・11
- 藤原克己 「古今集歌の日本的特質と六朝・唐詩」、文学第53巻第12号、1985・12
- 「古今集歌における日本的なもの」、日本の美学第9号、1986・11
- 藤平泉 「新古今時代の哀傷歌(1)——後鳥羽院尾張哀傷歌群を中心に——」、神女大國文第2号、1991・3
- 「新古今時代の哀傷歌(2)——慈円との十首贈答——」、神女大國文第3号、1992・3
- 古橋信孝 「〈三月〉やよひのつごもりの日」、言語第21巻第3号、1992・3
- 細田恵子 「八代集のありあけのイメージ」、文学史研究第15号、1974・7
- 本間洋一 「『雁嘶』『蟬嘶』についての覚書——平安朝漢詩表現の由来——」、解釈第31巻9号、1985・9
- 増井元 「方法としての枕詞」、国文学解釈と教材の研究第28巻7号、1983・5
- 増田繁夫 「小倉山・嵐山異聞」、文学史研究第24号、1983・12
- 松浦友久 『中国詩歌原論——比較詩学の主題に即して——』、大修館、1986・4
- 『詩語の諸相——唐詩ノート——』(増訂版)、研文出版、1995・10
- 『【万葉集】という名の双関語——日中詩学ノート——』、大修館、1995・4
- 松田武夫 『古今集の構造に関する研究』、風間書房、1965・9
- 松田豊子 『清少納言の独創表現』、風間書院、1983・3
- 丸谷才一 「三月尽と七夕」、海1982年5月号、1982・5

- 三木雅博 『和漢朗詠集とその享受』、勉誠社、1995・9
- 三宅えり 『『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』——嘆老詩をめぐって——』、
国語国文第63巻第9号、1994・9
- 森本茂 「小倉山考」、解釈第36巻1月号、1990・2
- 森本直子 「古今集における漢文学の日本的受容——『弥生のつごもり』・『長月のつごもり』歌について——」、学習院大学人文科学論集10、2001・9
- 森本元子 「歳暮の思い——私家集の女流たち(二)」、解釈第27巻12号、1981・12
- 焼山廣志 「道真の詩『早春侍宴仁寿殿同賦認春心製』『対鏡』の二詩をめぐって——道真の『白氏文集』からの摂取態度の一考察(その六)——」、
国文学論考第26号、1990・9
- 「道真の詩『新蟬』『春盡』の二詩をめぐって——道真の詩に投映されている『白氏文集』からの摂取態度の一考察——」、
国文学論考第27号、1991・3
- 矢嶋徹輔 「『蟬声』について」鹿兒島県立短期大学紀要人文・社会科学篇第47号、
1996・12
- 安田徳子 「旅人のいる風景——羈旅歌の変遷をめぐって——」、
名古屋大学文学部研究論集C(文学34)、1988・3
- 「『新古今和歌集』羈旅部の構造——羈旅歌表現の展開——」、
後藤重朗先生古稀記念・国語国文学論集、和泉書院、1991・2
- 「実詠から題詠へ——羈旅歌の変容をめぐって——」、
聖徳学園岐阜教育大学国語国文学第10号、1991・3
- 「藤詠考——古今歌人の詠歌基盤——」(『和漢比較文学叢書第十一巻 古今集と漢文学』) 汲古書院、1992・9
- 山口博 『王朝歌壇の研究宇多醍醐朱雀朝篇』、桜楓社、1973・11
- 山本利達 「貫之の序——大井川行幸和歌序をめぐって——」、
国語国文第39巻第4号、1970・4
- 柚山淳子 「中世文学作品における鐘の音——音の表現と捉え方——」、
愛文第20号、1984・7
- 芳賀紀雄 「理と情——憶良の相剋——」(『万葉集研究』二) 塙書房、1973・4
- 吉川栄治 「平安朝七夕考説——詩と歌のあいだ——」(『和漢比較文学叢書第三巻 中古文学と漢文学I』)、汲古書院、1986・10
- 「平安朝七夕再説——『古今集』誹諧歌を起点として——」(『和漢比較文学叢書第十一巻 古今集と漢文学』)、汲古書院、1992・9
- 吉川美春 「六月祓について」、金沢工業大学日本学研究所日本学研究第5号、

2002・6

- 吉田珠世 『『顕註密勘』論——密勘の生成をめぐる——』、
フェリス女学院大学日文大学紀要第8号、2001・3
- 吉永登 「万葉小倉山考」、国語国文第18巻第3号、1949・8
- 吉原栄徳 『勅撰歌歌枕集成 本文編』、おうふう、1994・10
- 劉小俊 「古典和歌における『鐘』の意象（その一）——暁の鐘と入相の鐘——」、
岡大國文論稿第30号、2002・3
- 「古典和歌における『鐘』の意象（その二）——聴覚素材としての特徴
——」、解釈第49巻3・4月号、2003・4
- 渡辺秀夫 『平安朝文学と漢文世界』、勉誠社・1991・1
- 『詩歌の森——日本語のイメージ——』、大修館、1995・5